WOMEN'S BASKETBALL

女子バスケットボール

チームワークの銀メダル。彼女たちが繰り広げた『スモールボール』は世界を驚かせた

スーパースターなき スーパーチーム

文／小永吉陽子
写真／藤田孝夫

大黒柱、高田真希 vs. アメリカ（決勝）

徹底された スモールボール戦術

5人制女子バスケットボールがオリンピックで史上初となる銀メダルを獲得した。準々決勝でベルギーとの死闘を1点差で制して初のベスト4に進出。準決勝ではフランスに16点差をつけて快勝。決勝では女王アメリカに75対90で敗れたが、堂々の戦いを見せてのメダル獲得である。

その戦いぶりはバスケットボールファンのみならず、バスケットボールを初めて観た人たちをも「面白い」「楽しい」と虜にした。何しろ、出場12チーム中、2番目に低い平均身長175・8センチの小柄な選手たちが、どこよりも速いスピードと正確な3ポイントシュート、しつこいディフェンスを武器に、高さと実力があるチームから次々に勝利を奪ったのだから。

指揮官のトム・ホーバスは2017年にヘッドコーチに就任したときから、周囲から高すぎると見られた「金メダル」を目標に掲げて強化を進めてきた。

「日本のスピードを生かし、シュートを打つスペースさえ作ればサイズのなさは問題にはなりません。また日本には世界一マジメに練習する選手たちが揃っています。日本のスピードとシュート力を生かしてハードワークを続ければ絶対に金メダルを目指せます」と発言し、就任当時から戦術を少しずつ変化させながら、オリンピックで勝負した『スモールボール』にたどりついた。

スモールボールとは、サイズの小さなチームが豊富な運動量を生かし、確率の高いアウトサイドシュートを量産して戦うスタイルのことだ。細かい戦術面でいえば、得点効率のいい3ポイントを多投し、2点シュートでは確率の高いペイントアタックを仕掛け、効率が悪いとされるロングツー（3ポイントラインより少し手前の距離で打つ2点シュート）をなるべく打たない戦い方である。

この戦術は近年のNBAで用いられているトレンドであり、3ポイントの名手であるステフィン・カリーやクレイ・トンプソンを軸としたゴールデンステート・ウォリアーズや、センターを起用しないスモールラインナップのヒューストン・ロケッツが用いてNBAを席巻したものだ。

ウォリアーズのスタイルは『スモールボール』と呼ばれ、センター不在のロケッツのスタイルはさらに小さい『マイクロボール』と呼ばれることもあった。ビッグマン不在の日本の場合も『マイクロボール』といっていいだろう。

効果的な3ポイントシュートを放ったオコエ桃仁花 vs. アメリカ（決勝）

ウォリアーズやロケッツのよう

東京オリンピックにおいて日本の3ポイントの確率38・4％は全体1位。特筆すべきは試投数の多さで190本は断トツ1位。もちろん、1試合平均試投数31・7本、成功数12・2本も1位。1試合で10本以上決めているチームも日本だけだった。決勝のアメリカ戦では3ポイントを抑えられてしまったが、準決勝までは40・9％の高確率を維持していた。

この高確率の3ポイントを生み出したのが、ゴール下にある長方形のペイントされた部分に切れ込んでいく「ペイントアタック」であり、そこからのキックアウトパスである。

司令塔の町田瑠唯はペイントエリアにどんどん切れ込んでいき、ディフェンスとのズレを作ってキックアウトからチャンスメイクした。その巧みな攻めで、準決勝のフランス戦では1試合最多アシスト18本というオリンピックレコードを樹立し、一躍注目を集めた。162センチの小さな司令塔が世界から賞賛を浴びたのだ。

また、ピック&ロールやスリップを巧みに使ってドライブしたり、町田の動きに合わせて高田真希や赤穂ひまわりがカッティングから合わせたりした。アメリカ戦でスイッチされてミスマッチが起きれば、すかさずポストアップして2点を狙いにいった。サイズがなくとも、ディフェンスでズレを作れば、高さがあるチームに対しても得点を取ることができる。

こうして次々に強豪を打破した日本の戦法は「ウォリアーズやロケッツに似ている」と世界中に驚きを与えたのだ。ただし、ウォリアーズやロケッツとの違いは、ステフィン・カリーやジェームズ・ハーデンのようなスーパースターが不在なことである。選手に話を聞けば「全員でチャンスを作った」「劣勢でもあきらめないで全員でディフェンスを仕掛けた」との言葉が出てくる。日本がスモールボールに踏み切ったのは、スピードと3ポイントのシュート力では絶対に負けない自負があるからこそ、何より、全員がチームの約束事を遂行できる組織力によって相手を根負けさせたのだ。ホーバスヘッドコーチは胸を張ってこう言った。

『日本にスーパースターはいないけれど、スーパーチームです』

アトランタ、リオ、そして東京へ

実のところ、3ポイントを主体に戦う戦術は今に始まったことではない。もともと、女子バスケの生命線は3ポイントにあり、1996年のアトランタ五輪では3ポイントのシュート力で台頭して初の準々決勝に進出している。当時の3ポイントの試投数は前回2016年のリオ五輪の1試合平均18・7本よりも多い23・25本。準々決勝のアメリカ戦では13／32本（40・6％）も決めている。

現在はピック&ロールとペイントアタックによってズレを作り出しているが、アトランタ五輪当時はパッシングやモーションオフェンスを多用してズレを作り出していた。また特筆すべきは180センチ台のウイングを揃えてオールラウンダー化を図ったことである。そのオールラウンダーたちがスピードある攻防と3ポイントのシュート力を生かしたことで、世界の中でも一目置かれる〝異質〟な戦い方を披露していたのである。

だが、いつしかサイズのある国も速攻に走り、確率の高い3ポイントを打つことが当たり前になってきていた。そして最終的に壁になっていたのがインサイドの差だった。どれだけ死力を尽くして守っても、最終的には高さでねじこまれて終盤に力尽きてしまっていたのだ。

1996年のアトランタ五輪でも、2016年のリオ五輪でも、決勝トーナメントにはたどりつくことができた。しかし8強の壁を破ることはできなかった。決勝トーナメントを戦い抜くチームになるには、高さの壁を克服し、もっと速く、もっと効率のいいシュートチャンスやスペースを作りだす必要性があった。戦い方を変えなければならなかったのだ。

そこで見出されたのが東京で披露した『スモールボール』だ。トム・ホーバスが就任した翌年、2018年のワールドカップあたりから、全員が3ポイントを打つスタイルに徐々にシフトチェンジしていったのである。この頃からインサイドの選手も本数は少なくとも、3ポイントを打ち始めるようになった。

時代背景やトレンドによって戦い方の変遷はあるものの、いつの時代も女子バスケの土台となるのは3ポイントとスピード、粘り強いディフェンスであることは不変であり、アンダーカテゴリーから一貫して同じスタイルで戦っていることが女子の強みといえよう。そして、サイズを克服する戦い方に挑み続けた歴史の積み重ねがある。現在、2年に一度開催されるアジアカップでは5連覇中であり、急に強くなったわけではない。これまで積み上げてきたものに戦略を徹底させたことが東京で花開いたのだ。

選手たちは試合後にいつも弾ける笑顔を見せていた。その姿からはチームが一丸となって貫き通した信念や、毎日突き詰めてやってきた練習量が垣間見えた。決勝進出を果たしたときにキャプテンの高田は「チームがひとつになって戦っているので、毎試合楽しいし、毎試合成長している」と発言していたほどである。目標に向かって戦略を立て、全員が同じ方向を向いて戦い抜く女子バスケは応援している者たちも楽しませた。金メダルには届かなかったが、サイズの差を克服した日本の戦いぶりは世界を驚かせたといえる。世界で『唯一無二』といえるバスケットボールで観る者の心を魅了したのだ。

究極のスタイルへの追求

ただ――まだ目標の金メダルにはたどりついていない。また、日本にしかできない唯一無二のスタイルを見せたことで、次なる戦いからは研究される立場になるだろう。そこでトム・ホーバスはこう言うのだ。

「バスケットボールはアジャスト（対応）するスポーツ。選手が変われば、選手の特色を生かすためにチーム作りは毎回変わります。日本にはアメリカの選手のようなビッグマンはいません。けれど、日本には速さとチームワークがあります。自分たちのスタイルを追求する中で対戦相手によってどうアジャストするか、これからもやり続けるだけです」

東京オリンピック後の9月、女子日本代表は新たなスタートを切った。トム・ホーバスは男子日本代表のヘッドコーチに就任し、女子日本代表のヘッドコーチにはアシスタントコーチだった恩塚亨が就任した。

バトンを受けた恩塚ヘッドコーチには新たな挑戦が待ち受けている。目指すスタイルについて恩塚ヘッドコーチは「日本が誇る世界一のアジリティを追求し、チームの原則を遂行しながら5人が自信を持って判断し、躍動感を持ってシンクロするバスケットボール」と理想を掲げている。また「これまで以上に個々のプレーの幅を広げていきたい」とも語る。簡単に表現すれば「各自が判断のもとでクリエイトするバスケットボール」といえるだろう。

これは日本が目指す究極のスタイルであり、チームが成熟するには時間を要するだろうが、バスケットボールは常に進化していくもの。トム・ホーバスの言葉を借りれば、これからも世界の強敵に対してアジャストするチャレンジをしていくだけだ。

恩塚ヘッドコーチのもと、金メダルを目指す日本女子バスケットボールのチャレンジはこれからも続く。

トム・ホーバスヘッドコーチと抱き合う宮澤夕貴

町田瑠唯、準決勝のフランス戦では18アシストの五輪新記録